

「ありがとうアニキ」

坂口 裕靖

あけましておめでとうございます（拝）。ウクライナ戦争の影響が広がる年初ではありますが、今年もよろしくお願ひ致します（拝）。さて開戦から10ヶ月が経ち、クリスマスを迎えました。報道される割合もかなり落ちてきて、ゼレンスキー大統領の訪米がかるうじて話題にのったぐらいでした。相変わらずミサイルが飛び交っているようですが、無人機による反撃も効果をあげているように伝わってきます。この冬が正念場なのかもしれません。

「Demolition Man」という1993年の映画があります。大地震で一度壊滅し、サンフランシスコとロサンゼルスが合体したという、2032年のサンアンジェルス（あと9年か...）。自動車はすべて自動運転で、音声認識によりマニュアルモードが解除されるとか、ドラッグ・タバコはおろかアルコールまで禁止されてるとか、人体の

直接接触が禁止されてセックスもパーティ前提とか、タコベルが超高級レストランになってるとか、暴言を吐くと街角の端末が違反チケットを出してくるとか、色々示唆的（かつ現在において一部達成された）未来観が散りばめられた作品ではありますが、その中でいい大人の警官たちが昔のCMソングを嬉々として歌う、という描写があります。これが公開された1993年当時、CMソングとかを歌として捉えること自体がおかしいことであり、それに親しんでいることもファニーな状況で、さらに警官が歌っていることが滑稽である、というコンテキストがあったわけです。当時は「ホワイトハウスがホームページを作ったらいい」とか、インターネットが家庭に落ちてくる直前の状況（windows95より前、win3.1ですからね）であり、ネット経由の情報は基本的にテキストベース、かつそ

もそもインターネットコネクティビティ自体が稀有な状況でした。compuserveとかniftyとかのパソコン通信時代です。今の子供達がそんな状況を想像できるかどうかはよくわかりませんが、とにかく無料のムービーとかサウンドはテレビもしくはラジオに限定されていた状態でした。ぴーひょろなモデム（そもそもスマホ世代にモデムという単語を理解できるだろうか... デジタル信号を音声電話でやり取りできるように変換する機械です）では画像がせいぜいで、それですらネットニュースでは分割して伝送されていた時代です。このころアメリカではケーブルテレビが普及してて、そこそこの収入がある家庭の殆どに入っていたと思います。筆者が高校の頃、80年代初頭ですが、交換留学生と話をしたら、「うちはビンボーなので、テレビは利用料が高いから持ってない」と言っていたのが印象的

One Point BUZZ WORD

クーラント

xvに乗り始めて早5年半、2回目の車検もなんとか乗り越え、スタッドレスも履き替えたところで、ディーラーの営業さんが困り顔。「ちょっとハードな話になります...」とか口火を切って伝えてきたのは、冷却水にオイルが混じってるとのこと。基本的にオイルと冷却水は流路が異なるために混じるはずがないのが、なぜか混じってると。とりあえず冷却水の量を確認したときに見つけたとのことで、半年前の車検の時は気づけなかったということでした。もうね、ショックでかいです... まあハードウェアなのでいつの日か壊れるのは頭でわかってるのですが、なんかこう、もうちょっと長持ちするかな、とか思ってたもんでして。そんで

もって、これ言われたのがちょうど年末の最終営業日だったわけ

ですよ。そもそもスタッドレスが丸坊主だったので新しいのに替えたかったのですが、タイヤが入ってこないとのことで当初予定より2週間ちょい遅れてて、だから半年点検も一緒にやってもらったところこの状況。まいりました...

そいでもって家に帰ってから、とりあえず自分の目でも確かめてみようと思って見てみました。まず第一印象として、冷却水の容器から透けて見える冷却水の色がどす黒い... スバルの純正品は青い液体のはずなので、明らかにまずそうです。それでも冷却水を実際に見てみようと思ったものの、形状の関係でよく見えません。仕方ないのでキレイそうな棒を突っ込んで引き上げてみたところ、べったりとオイルが... オイル混入をこの目で確認した次第です。つかこれ、洗浄しなくても大丈夫なもんなんだろうかと不安になるぐらい。これ修理にどれくらいかかるのかしら... まあ新車の頭金程度かかるのだとすると微妙ですね。なかなか奇跡的なナンバーなので、できれば長く乗ってあげたいと思いつつ、まあでもハードウェアは消耗品だしな、という思いが交錯する年末なのでした。

でした。当時ですら、テレビといえばケーブルテレビを意味していたわけです。まあともかく、1990年代当時、無料コンテンツの扱いというのはそんなものでした。レコードとか映画とかが課金コンテンツであり、無料のテレビはそれより一歩下、というのが一般的な序列だったのではないのでしょうか。これが時代を遡って1970年代ごろとなると、もっとすごいわけです。伝統芸能がノーメンクラチャー一位であり、演劇があって映画があってやっとラジオかテレビか、「まああそこらへんは無料だからね」と鼻で笑われたなか、アニメとか特撮とかがどういう扱いを受けていたのか、今の若い人に想像つくでしょうか。子供向けエンタメの主流は雑誌で、しかもそれは有償コンテンツなわけです。まあ回し読みとかもあるから、知り合いにスネ夫がいれば無償になるかもしれませんが、それであっても人間関係を換金しているようなもんです。そういう環境に恵まれないとしても、たいいていの町には貸本屋があったんじゃないかしら... とりあえず筆者の知り合い周辺にはありました。そこで読み古されたコンテンツをかりうじて摂取できるわけです。残念ながら当時の図書館はマンガを収蔵してくれませんでした。今となっては、それがどれだけ文化的損失をもたらしたのか、想像するのももったいない限りです。

一方でテレビやラジオは初期投資が必要なものの、コンテンツ自体は無償でした。だから当時の子供達は、アニメとか特撮とかをかぶりつくように観てました。当然ビデオもないし、テープレコーダーの普及も微妙なところなので、一言一句聞き逃すまいと食い入るように観ていたわけです。そんな我々にとって、オープニング・エンディングを覚えていないはずがありません。それこそ数十回以上、週に一回摂取するわけ

なのですから。そして、その主題歌を歌っていたのが水木一郎さんや堀江美都子さん、ささきいさおさんを始めとする方々だったわけです。当時の流行「歌手」よりも身近な存在なのでした。その水木一郎さんが亡くなられたのはなんとも残念です。あの朗々とした歌声が、今後増えることがなく、生で聞くことができないというのは大変悲しいことです。

映画版宇宙戦艦ヤマトのヒットがビジネス的な注目を呼び、現在に至っているわけですが、その状況下で切磋琢磨された方々が台頭し、記念碑的な作品がぼこぼこ出てくるようになって、現在は日本の誇るべき分野といっても過言ではないでしょう。社会的カムフラージュたる女子高生の制服を着た、歴史ある政府組織の暗殺者たちが喫茶店やってるアニメを日本以外で作れるのでしょうか。コンテクストの説明だけでワンクール消費しちゃうそうじゃないですか。ましてやドンブラ...

アニメや特撮の主題歌、特に70年代から80年代にかけてのものは、今から見るとなかなか興味深いものがあります。軍歌や学生運動といった動向の影響を受けざるを得ず、自己犠牲が尊ばれ、他人を愛し、思いやる心を持ってほしいという意図がびしびし伝わってくる熱い歌が多いのが特徴でしょう。実際のところは「俺はイヤだからお前が自分から進んでやれ」というニュアンスを感じ取らなくもないですが。水木一郎さんからはちょっと離れてしましますが、筆者は池袋東武の特設会場でライブを見て以来の堀江美都子さんのファンなので、「大空魔竜ガイキング」挿入歌、「たたかいの野に花束を」を推しておきます。絶対ガイキングに乗りたくなくなる、すごい歌詞だぞ。ミッチーの歌声がしみる...

ちょっと立ち止まって冷静に考えてみる

と、例えば4クールあるとして約50回前後、同じ陣営との戦闘を生き延びないと同じ主人公で続けられるわけがないのです。ガンダムの次回予告で「君は生き残ることができるか」はまさにこの問題に対する富野監督の諦観なのではないでしょうか。実際には映画「1917」がリアルなところでしょう。逆に言えば50回戦って50勝0敗で勝てる相手はめっちゃくちゃ楽勝なはずなので、戦う価値がありそうに見せるためのドラマを構築しなければならぬのは大変じゃないかとは思いますが。まあ我々はそんなこと一切気にせず「主人公がんばえー」してたわけですが。

子供向けから始まったアニメ・特撮は子供向けの部分を残しつつ、現在それを浴びて育った世代が今現在の問題と向き合いつつ、新たな作品を作り続けてくれています。水木一郎さんはその複数世代を通して、共通する一本の柱でした。外野がニヤニヤしながら「え、主題歌？」とか蔑まれるのを振り払いつつ、カラオケで主題歌を熱唱する我々の心の支えだったと言っても過言ではありません。あれほど声を枯らして大絶叫できる歌が他にあるのでしょうか。いや、あるんだろうけど知らんのだわ。そして無償コンテンツだったからこそ、同世代には覚えがあるのですわ。まあ逆に言えば、だからこそ、その熱さをいいように利用され、やりがい搾取とかに陥りやすいのかもしれませんが。

Hiroyasu Sakaguchi
株式会社 IMAGICA Lab.